

中島敦・覚え書

——行為と思索——

中 島 甲 臣

中島敦の作品（思考）の特徴の一つに、行為（肉体）への憧憬・傾斜がある。

小文ではこのような特徴はなぜ現われたか、それは彼の基本的な思考体系とどのような関わりをもつか、それは作品にどのように現われているか等々を、

原初的情動としての側面

宿痾に基因する側面

行為による思索の止場

の三点に即して考察する。このようなアプローチが先に設定した課題に対して果して適當であるか、は当然問題となるが、そこに内在するであろう錯誤については他日の考究に俟ち、今は一応上記の方針によることにする。

彼は幼少の頃は丈夫であつたか否かは分らぬが「身の小さい弱蟲の私は、それまで（小学校五年）喧嘩をして勝つたためしがない」（虎狩）少年であつたが、「中學に入ってから目立つて身が弱くなった」（狼疾記）とある。一方その才幹については、彼は自分のことは、としてか記述は少いが、彼の作品中の人物に仮託して述べれば、疑いもなく「博學才穎、若くして名を虎榜に連ね……」（李徴・山月記）であり、「幼時から非常な秀才で……六歳にして書を読み、十三歳にして漢詩・漢文を能くした」程の「俊才であつたに違ひない」（伯父端・斗南先生）。しかしこの程度の状態では精神と肉体との対比はさまで彼の意識には登らなかつたであらう。心の底では彼は自己の「精神」が「肉体」に優越していると考えていた筈である。しかし中学生としての体の弱さは、やがて殆んど生物の本能と云つてもよい程の「肉体への屈服」と「精神への蔑視」を意識させられる。

「学校ができるかと思つて、あまり生意氣な真似をするな。」と、五年生の一人が彼に言つた。……三造は何も辯解しなかつた。彼は明らかに恐怖に襲はれてゐた。……「眼鏡を取れ。」と、一人が言つた。……いはれた通りに眼鏡をとるのは、意氣地がないと感じてゐた。さうして黙つて、二人の上級生を睨みつけた。……その瞬間、右の頬をしたゝか平手で叩かれて、眼鏡を落した。カッとなつた彼は、夢中で彼等にとびかゝつて行つた。忽ち彼は草の上に投出された。……俺は意氣地のない男だ、と彼は考へてゐた。せめて、自分から進んで眼鏡をとらなかつたことだけが、わずかに彼の自尊心を慰めた。……腕力がないといふことが、現在の彼にとつて如何に致命的なことであるかを、彼は考へて見た。その前には、学校の成績の如きものは、何の価値もないのであつた。……

……プウルでは、三人の中學生が竝んで泳いでゐた。競泳の選手でもあるらしく、いずれも、鮮やかな泳ぎぶりであつた。彼等は全く良い體格をしてゐた。……彼は自分の生つ白い腕を眺め、彼等に対して、ひけめを感じない譯にはいかなかつた。丁度何年か前、上級生に打たれた時に感じた、あの「肉体への屈服」と「精神への蔑視」とを、彼は再び事新しく感じるのであつた。

(プウルの傍で)

同様の記述は「虎狩」において、趙大換の體驗として挙げられている。しかしこれは別に彼特有の現象ではなく、かつて「青白い秀才」達が多かれ少なかれ味わされた經驗であり、その意味では、このような事項に関する彼の記述に郷愁を覚える人も少くはないであろう。閑話休題。だが、肉体を高しとみるこの程度の対比は、彼の意識の深層に底流として潜むことにはなるうが、まだ彼の存立を根柢から揺がすものとはなっていない。

例えば先の毆打事件の記述の中に、後に「悟淨歎異」で「狼疾」の打破への願望の象徴の一つとして登場する孫悟空が、それとは若干異なつた役割を担つてではあるが、次のような形で登場している。「ふと自分が何か神通力でも得て、散々に今の二人を苛める場面を、彼は頭の中で空想して見た。その空想の中で、彼は孫悟空のやうに色々な妖術を使つて、さんぐに彼等を悩ますのであつた。」「空想の中で」という処がいかに後の「狼疾」を想はせる。両者における悟空の登場は偶然ではなからう。

彼は自己の病弱を屢々語っている。例えば「中學に入ってから目立って身体の弱くなった彼は、就寝後、眼をとちては、『死といふもの』を―抽象的な死の概念ではなく、病弱な自分に遠からず訪れてくるに違ひない、(本當に其の頃彼は壽命の短いに違ひないことを確信してゐた) 直接的な死を考へた」。(狼疾記) 等と。しかし一方では「真面目に面をつけて竹刀を振廻してゐる私達の方を、例の細い眼で嘲笑を浮べながら見てゐるのだつた」(趙大煥が敦等を・虎狩)とか又「それは、三造の高等學校を卒業する年で、丁度その少し前に、彼は學校で蹴球をしてゐて、顔を蹴られ、顔中繃帶をして病院へ通つてゐたのであつた」。(斗南先生) 等に見られるように彼は快活な(学生)生活を送っている。又かなり長距離の旅行もたのしんでいるし、最後は南洋にも出かけている。ではこの場合の病弱とは何かとの疑念も湧くが「思索」との関連で云えば、彼は正しく「病弱」であつた。それは喘息である。彼は一高在学中に「胸を病い」大連に「帰郷」し、爾後喘息を患うようになったと云はれている。(親戚談)。又喘息は発作の収まっている時はその行動は常人と一応大差はないと云はれている。上記の矛盾感の一部はそれで消えるかも知れない。

彼の「病弱」は凄絶でさえある。「昨夜就寝する頃から少し胸苦しかつたが、夜半果して例の発作に襲はれて、起上る。アドレナリン一本をうち、朝迄床上に坐つてゐる。呼吸困難は稍々をさまつたが、頭痛甚だし。朝になつて未だ不安なので、エフェドリン八錠服用。朝食は攝らず。息苦しいため横臥する能はず。終日椅子に掛け机に凭り、カメレオンの籠の前に、頬杖をついて眺める」(かめれおん日記)。これでは「私の心に時々浮んでくる想像―一生の終に臨んで必ず感じるであらう・自分の一生の時の短かさ果敢なさの感じ」(かめれおん日記)はまさにその

通りであつたろう。この状態は「肉体への屈服」とか「精神への蔑視」などとは到底同列には論ぜられない。文字通り生の（又は死の）深淵に臨むようなものであらう。それが彼の思考及びその結果の「文学」に反映しない筈はない。「牛人」のような無気味な小説はその例であらう。

或夜、夢を見た。四邊の空氣が重苦しく立^{たちこ}罩め不吉な豫感が静かな部屋の中を領してゐる。突然、音も無く室の天井が下降し始める。極めて徐々に、しかし極めて確実に、それは少しづつ降りて来る。……逃げようともがくのだが、身體は寢床の上に仰向いた儘どうしても動けない。見える筈はないのに、天井の上を真黒な天が盤石の重さで押しつけてゐるのが、はつきり判る。……其の貌は最早人間ではなく、真黒な原始の混沌に根を生やした一個の物のやうに思はれる。叔孫は骨の髄まで凍る思ひがした。己を殺さうとする一人の男に対する恐怖ではない。寧ろ、世界のきびしい惡意といった様なものへの、遜^{へりくだ}つた懼れに近い。

彼はいつのまにか「狼疾」に襲われる。敦の読者には周知の、あの「存在への疑惑」、過度の分析的思考、自我の存在への疑惑、形而上学的不安等々の、「我と自らを噛みさいなむ」（かめれおん日記）ような自虐的思考が始まる。なぜそのようになったか。当人自身は文飾もあらうが「こんな筈ではなかつたのだが、一體、どうして、又、何時頃から、こんな風になつて了つたのだらう？ 兎に角、氣が付いた時には、既にこんなヘンなものになつて了つてゐたのだ。いゝ、悪い、ではない。強ひて云へば困るのである。」（かめれおん日記）と云っているが、強いて

云えば彼の資質、生い立ち、性癖、健康状態、職業等が複雑に絡み合つての結果であらう。彼の秀れた資質が、先に述べた身体の衰弱と、上記両者と関連を持つたであらう彼の性癖（臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」。山月記の李徴はまぎれもなく彼の分身である）と相俟って、逆に、我と我が身を蚕食するようになったのではないか。狼疾に在る彼はある意味で「虎」になる寸前の李徴である。（この辺詳論は省く）。

併し「何とかしなければならぬ。これではどうにも仕様がなない。このままでは、生きながらの立消だ」（たちぎえ）かめれおん日記）。脱却の道は何か。それを示す、または示そうとした作品が「わが西遊記」である。その眼目は「行為」であり、模範は「悟空」である。南海の觀世音菩薩摩訶薩まかざうは教える。「……惟ふに、爾は觀想によつて救はるべくもないが故に、之より後は、一切の思念を棄て、たゞ／＼身を働かすことによつて自らを救はうと心掛けるがよい。……世界は、概観による時は無意味の如くなれども、その細部に直接働き掛ける時始めて無限の意味を有つちや。……身の程知らぬ『何故』は、向後一切打捨てることぢや。之をよそにして、爾の救は無いぞ。さて……玄奘の弟子の一人に悟空なるものがある。無知無識にして、唯、信じて疑はざるものじや。爾は特に此の者について學ぶ所が多からうぞ。」（悟浄出世）と。

ではなぜ行為が救済の目安となるのか。第一には、それはやはり狼疾のアンチテーゼとしてであらう。彼が狼疾で直面している形而上学的疑問は、多く正統的であると（筆者には）思われるが（従つて筆者には大變興味をそそられる問題であるが）それが正統な「哲学」の問題として対処されず狼疾になったのは、思考を含む彼の心身全体の在り方がやはり「健康」でなかったからであらう。彼は狼疾に在る自己の状態をつぎのように述べている。「実

際、近頃の自分の生き方の、みじめさ、情なさ。うち／＼と、内攻し、くすぶり、我と我が身を噛み、いぢけ果て、それで猶、うすつぺらな大儒主義（シニシズム）だけは残してゐる。」（かめれおん日記）。さらに先に述べた「病身」の悲痛な状況、また、中学時代の「肉体への屈服」と「精神への蔑視」がまだ底流に継続していたら、行為（肉体）への傾斜は蓋し当然であろう。更には、これまた、よく引用されることだが、ゲーテの「思想」があるだろう。「ある時はファウスト博士が教へける『行為（タート）によらで汝は救はれじ』（和歌でない歌（うた））」と。

では果して「行為（タート）によって汝は救はれ」たか？ これは、筆者にとっては率直に云って頗る疑はしい。なぜかと云うと、恐らく「行為による救済」の内容を示す手掛となっている筈の、悟空についての記述（悟浄歎異）、には、当方にとって興味ある事項が多く見られるにも拘らず「疑問の解明」に直接つながると思われる事項が見当らぬからである。そこにあるものは行為者に対する賛美であり、生の（せい）または生（せい）による認識である。

毎日早朝に起きると決つて彼は日の出を拝み、そして、始めてそれを見る者の様な驚嘆を以て其の美に感じ入つてゐる。心の底から、留息をついて、讃嘆するのである。これが殆んど毎朝のことだ。松の種子から松の芽の出かかつてゐるのを見て、何たる不思議さよと眼を瞠（みは）るのも、此の男である。

.....

強敵と闘つてゐる時の彼を見よ！ 何と、見事な、完全な姿であらう！ ……それは、輝く太陽よりも、咲誇る向日葵（ひまわり）よりも、鳴盛る蟬よりも、もつと打込んだ・裸身の・壮んな・没我的な・灼熱した美しさだ。あのみつともない、猿の闘つてゐる姿は。 等々……

悟浄は緑の野にあって枯草を食み、悟空は黄金なす緑に満喫する。狼疾に対する美事なアンチテーゼは画かれて
いるが、ジンテーゼはない。無限遡行の自我意識への疑念は本当に解決されたのか、世界および人間的存在の究極
の意味は分ったのか分らないのか、また、分らなくてもよいということが分ったのか。作品に現われる限りそのよ
うな問に対する答はいずれもノーである。……

狼疾に対する最も正解らしい記述は意外にもつぎのような文である。

最早誰にも道を聞くまいぞと、渠は思ふた。「誰も彼も、えらそうに見えたつて、実は何一つ解つてやしないんだな」と悟浄は獨言ひとりごとを云ひながら歸途についた。『お互ひに解つてゐるふりをしようぜ。解つてやしないんだつてことは、お互に解り切つてゐるんだから』といふ約束の下にみんな生きてゐるらしいぞ。斯ういふ約束が既に在るのだとすれば、それを今更、解らない解らないと云つて騒ぎ立てる俺は、何といふ氣の利かない困りものだらう。全く。」

のろまで愚圖の悟浄のことゆゑ、翻然大悟とか、大活現前とかと云つた鮮かな藝當を見せることは出来なかつたが、徐々に、目に見えぬ変化が渠の上に働いて来たようである。……自分は、そんな世界の意味を云々する程大たいした生きものでないことを、渠は、卑下感を以てなく、安らかな満足感を以て感じるやうになつた。

……悟浄の肉体は最早疲れ切つてゐた。……そのまゝ深い睡に落ちて了つた。全く、何もかも忘れ果てた昏睡であつた。(悟浄出世)

昏睡できたのは、疑念がある意味で解消したからである。では、それは「行為」によって、であるか。悟浄にとって「昏睡」の前に何があったか。「教を乞はう」とする彼の遍歴が、である。遍歴をしも尚、行為と見做しうるか。狼疾に在った彼も「遍歴」をしている。彼は云う「い、そ、ぶの話に出て来るお洒落鴉。レヲパルディの羽を少し。ショウペンハウエルの羽を少し。ルクレティウスの羽を少し。莊子や列子の羽を少し。モンテニユの羽を少し。何といふ醜怪な鳥だ。」（かめれおん日記）と。觀世音菩薩摩訶薩の行為による救済の指示は悟浄が流沙河の遍歴を終えた後に与えられている。「和歌でない歌」には文字通り「遍歴」の項があり、先の行為の歌はその最後（と云ってもよい）に在る。行為は遍歴の結果想定されたものであって、遍歴則行為とは敦は考えていない。

悟浄が「何もかも忘れ果てた昏睡」におち入り得たのは「狐憑」のシャクのように、憑いていた狐が落ちたからである。狐が落ちたのは、思想的には多分「遍歴」が大いに関係しているであろう——だから「悟浄出世」では遍歴の後に一種の解脱が説かれている——が「作品」に従う限りその経緯は必ずしも分明ではない。

筆者は彼の「妄想」に多大の興味をもつ。あの形而上学的な様々な問題は「自分はそんな世界の意味を云々する程大した生きものでないことを、……安らかな満足感を以て感じるようになった」として安楽死させてよいものはあるまい。

しかし、一方、彼が置かれた状況を考えれば、彼の想念が「行為」へ傾斜して行ったのは当然のようにも思はれる。恐らく「弟子」もまたそのような系列の一つであろう。

宋から陳に出る渡船の上で、子貢と宰予とが議論をしてゐる。……何を言つてゐるんだと、傍で子路が苦い

顔をする。口先ばかりで腹の無い奴等め！ 今此の舟がひっくり返りでもしたら、奴等はどんなに真蒼な顔をするだらう。……才辯縦横の若い二人を前にして、巧言は徳を紊るといふ言葉を考へ、矜らかに我が胸中一片の氷心ひょうしんを待むのである。

あとがき

筆者は数学科出身である。にも拘らず畑違いのこのような文を草するにはそれなりの理由がある。以下にそれを述べる。

敦研究家の畏友佐々木充氏の「中島敦の出自について」（方位第2号所載・双文社出版）を借用する。「かくして、中島家は、明らかに、学問の家としてのみ考へてはいけなかったのであった。中島家は学問の家であるとともに、規矩の家でもあったのである。この規矩の家の血は、たとえば……また中島正系第十五代中島甲臣氏は……数学を……。」「正系とか何代とか大時代な表現ではあるが、敦さんは筆者の父の従兄弟である。したがって当然敦さんのことは、その俊鋭ぶりを含めて、勿論彼が作家になる以前から、色々聞かされていた。その作品はいずれも面白く、あるものは身につまされながら、戦時中に発刊された時から読み耽った。佐々木氏から屢々「発表」を慫慂されたが、今回ようやく可能となった。勿論畑違いでもあり多大の不安なくしてではない。本紀要の趣旨にある、論

文、研究ノート等、の「研究ノート」に憑依し、あるいは佐々木氏の予想されたものとは異なる性格のものかも知れぬが、漸く草した。bekanntとerkanntは異なる、と、日頃学生に与えていた教訓を我身に振り返って痛感させられた。種々の理由から、永年のbekanntのみ依存しerkannt化の作業は殆んど出来なかった。その欠点は十分に自覚している。

最後に一つ。筆者はその「出自」上、敦さんを他の年長の従兄弟（敦さんおよび亡父の）の方々と区別して考えることはできない。敦さんもその人々の一人とみる。召使から見ればすべての主人は唯の人という譬もある。一方召使はその器量でしか主人を見れないのも事実である。内側からの視点の得失であろう。